

外科医と子育ての両立について

船橋市立医療センター

佐藤 やよい

初期研修医で外科をまわってから、外科が一番自分に合うと感じて、消化器外科医を始めてもう 14 年、医師 16 年目になります。船橋市立医療センター外科で働き始めてもう 11 年目となりました。

船橋市立医療センター外科には現在院長を含め 17 人の外科医がおり、4 人の女性外科医がいます。4 人のうち 3 人は乳腺外科医で、バトミントンの世界大会に出るためヨーロッパに行ったり、子育てしながら論文をバンバン書いたりしている、面白い外科女医ばかりです。

女性外科医と聞いて心配されるのは、仕事と家庭の両立どうするの、ということだと思います。

研修医のころから、外科医の QOL の悪さはもちろん理解していました。特に女子の場合は人生において立ちはだかる（目標である）「結婚・子育て」の障害になるらしいことは聞いてはいましたが、私の場合は手術が楽しくて仕方がなかったので、全くといっていいほど興味はありませんでした。ただ漠然と、結婚はしたくないけど（仕事を辞めると言われそうなので）こどもは欲しい、でも産むなら中堅くらいになってもう少し落ち着いてから（手術への熱がもう少し冷めてから）、と考えていました。

結果、余裕は少しできた中堅くらいで縁があり子どもを産みましたが、中堅になっても、手術の腕や感が鈍るのはいや、という焦りは妊娠中から既に感じていたので、今考えると外科医人生の中でいつ産休を取っても同じだったかもしれません。産後しばらくすると、子どもといる時間を楽しみながらも、腕や感が、というよりもまず社会に紛れていないという自分に焦りを感じて葛藤しました。賛否両論はありましたが、結局産後 2 ヶ月で仕事復帰となりました。

そんな状況で私が恵まれていたのは、上司、同僚、部下、つまり仕事仲間です。当時はみな男性医師でしたが、状況を理解してくれて（腫れ物に触るような感じだったかもしれませんが）、当直や緊急呼び出しも文句なく肩代わりしてくれていました。

ちょうど国の政策としても働く女性の活躍が推進され始めた時期で、時を同じくして新設された院内保育園は非常に助かりました。近くて安心、子どもに熱が出てもすぐに迎えに行けましたし、なにより仕事中に母乳をあげに抜ける環境がありました。ちょっと行ってきます、に協力してくれた仕事仲間感謝です。

子育てが始まってからもう 7 年が過ぎましたが、仕事の内容が変わったかというところでもありません。予定手術や外来、当直は通常通りこなすようにがんばります。3 次救命センターなので緊急手術も多くありますが、子どもを迎えに行かなければならないような時は、同僚や上司が、仕事を代わってくれたり、迎えに行ってくれたり（！）して、カバーしてくれます。また、医者になったころから、災害医療に興味を持っていたので、後期研修医で外科の他に救急、災害医療を勉強した後、現在の医療センターでも DMAT として活動しています。毎年地震や水害などの災害が日本各地で起きており、病院で災

害対策本部を立てたり、被災地に派遣されたりすることが多くなってきました。災害訓練も多数あり土日が潰れてしまうこともあります。先日は行政・自衛隊・消防との災害訓練に子どもも連れて行き、自衛隊の大きな船に乗らせてもらい訓練を見学して、満喫したようでした。

子育てでは、なるべく一緒にいる時間を作る、を目標にしており、普段朝夜ご飯は一緒に食べます。なるべく早く迎えに行き、帰りに今日あったことを報告しあうのが楽しみです。両立できているかと聞かれたら、できています、と答えるでしょう。上司や子どもはなんと言うかわかりませんが…。

変わったことと言えば、早く帰らせてもらう分残す仕事がないように、今まで仕事の合間に少しのんびりしていたような時間も、何か今の時間でやっておくことはないか、と考えるようになりました。子どもの迎えの時間から逆算して、今日は何時までこれをやろう、などプランを立てるようにもなりました。私を知る人はきっと相当意外に思われることでしょう。子どもができる前は、今できることでも明日まで延ばすくらい面倒くさがりでしたが（今でも面倒くさがりではありますが）、今は時間を有効に使えるようにと心がけています。

今の日本は、女性の社会進出が望まれ、なおかつ少子化対策で子どもを産めと言われ、そして働きながら子どもを育てるには社会がまだついてきていない、というのが現状です。私は恵まれた中にいるので、仕事と子育てを両立できている、と豪語しますが、そうでない方がたくさんおられるのは分かります。

ただ、世界的にみても、仕事でも子育てにおいてももはや、男である、女である、ことはあまり関係ない時代になってきています。女性は手先が器用ですから外科医に向いていると思いますし、一方、バリバリと仕事をされている男性の中でも、実はもっと子育てに関わりたいと思っている方はわりといると感じます。働き方改革も叫ばれていますし、性別関係なく、みな仕事と家庭を両立できるようにみんなで協力しあう、という仕事場ができれば、と考えています。



写真：右から 2 番目